

# ガラクタ屋の情熱の結晶 大英博物館 誕生物語

世界各地から年間500万人以上が訪れる大英博物館。  
約700万点の資料を所蔵、すべては無料公開されている。  
仰々しい日本語から、英政府が創設した博物館だと思ふ人もいるかもしれない。  
しかし、基になっているのは、ある名士が趣味で集めたコレクション。  
この人物の遺書がきっかけで、複数の紳士たちが奔走。  
数々の困難をどうにか乗り越えて、やっとオープンさせたのが大英博物館なのである。  
今号では、その誕生までの物語をお届けしたい。

写真中央から時計回り：ホルネシュイトエフ（ブトレマイオス朝時代初期の神官）の棺とミイラ（Coffin and Mummy of Hornedjitef）／クロイソスの金貨 the Gold Coin of Croesus／ラムセス2世の胸像 the bust of Ramesses II／縄文土器 Jomon Pot／バルテノン神殿彫刻群（別名「エルギン・マーブル」） Elgin Marbles（写真すべて © the Trustees of the British Museum）

●ザバイバー ●取材・執筆／木下 真寿美・本誌編集部



## 英政府を困惑させた遺書

一七五三年一月十一日、一人の男性が、静かに息をひきとった。ハンス・スローン卿 (Sir Hans Sloane)。享年九十二。友人の博物学者ジョージ・エドワーズと家族が看取ったその顔には、満ち足りた表情が浮かんでいたという。「思う存分生きた」。まるで、そう言っているかのような、穏やかな静けさに包まれた彼の最期。しかし、その死の十六日後、遺書が公開されると一転、国王や政府を巻き込んだ騒動が引き起こされたのだった。

遺書の内容とは、こうだ。  
「生涯かけて集めた約八万点に及ぶコレクションをまとめて、国に譲渡したい。ただし、国は二人の娘に一万ポンドずつ、計二万ポンド支払うべし」

コレクションの一般公開も念頭に置かれており、「好奇心旺盛な人々の知的欲求、すべての人々の学習、研究情報収集に役立てばよい」との希望も添えられていた。

さて、このコレクションに含まれていたものとは――三千五百冊もの貴重な写本を含む四万冊余りの図書。コインや工芸品、中国絵画、ワニの剥製、植物の標本や鉱物類……

まさに古今東西のあらゆるもの。外国へ行くのが容易でなかった当時、これだけのものを集めるにはかなりの熱意と資金が必要だっただろう。しかし、一方、そのコレクションの雑多さ故に、スローンは一部で、「ロンドンの大方ラクタ屋の親父」と評されていたという。数の点では圧倒的であったスローンのコレクションだが、こうした博物館本類の民間コレクションは、当時の英国では珍しくなかった。ニュートンが万有引力の法則を解明したことに象徴されるように、十七世紀の欧州では近代科学が大きく発展。これを受けて十八世紀には、博物館本類の資料をコレクションすることが流行したためである。世界の成り立ちを理解する貴重な資料か、はたまたガラクタか。どう評価すべきかわからない膨大なコレクションを突然目の前に置かれ、「二万ポンド支払え」と迫られた英政府、当然のごとく、困惑したようだ。

スローンの死から十六日後、遺書で指名された管財人たちが開いた最初の会合で、まず、国王に話をもちかけることが決まった。しかし、運悪く、時の権力の座に就いていたのはジョージ二世（在位一七二七年―一七〇年）。愛人を次々とつくったことでも有名なこの国王、こと金銭に関しては欲が強かった。スローンの遺書にもまったく関心を示さず、「そんなものに使うお金があると思うのか」と発言したと伝えられる。

意気消沈して戻ってきた管財人たちは、気を取り直して今度は議会へと話をもっていく。しかし、オーストリ





ハンス・スローン卿 (T. マリ作 T. Murray)

ア継承戦争などを含む第二次百年戦争のさ中であって、苦しい台所事情だったこともあり、議会も、国王同様消極的。提案は据え置きされ、「このまま葬りさられるのだろうか」というあきらめにも似た危機感も、管財人の間に漂い始めたのだった。



### 非凡なる好奇心の持ち主

さて、この一大コレクションを築き上げたハンス・スローン卿というのはどんな人物だったのか。生まれは北アイルランドのキリレイ。一六六〇年四月十六日、七人兄弟の末っ子として生を受ける。スコットランド人の父は、貴族であるクラニボインチエスター大聖堂の名譽参事会員の娘だった。

子どもの頃から好奇心旺盛。豊かな自然に囲まれて育ち、植物を始めとするさまざまな生き物に興味をもった。のびのびと育ったが、十六歳のときに病に倒れる。肺を患い、三年間、自室にこもつての療養生活を余儀なくされた。一時は回復が危ぶまれながらも、病から復帰。このときに、将来、医学の道に進むことを決意したのだった。

十九歳で、ロンドンに上京。当時のロンドンでは、科学者たちが切磋琢磨しながら、次々と新しい研究に取り組んでいた。ウオーター・レーンに居を構えたスローンはすぐに、『植物誌(ヒ

ストリア・プランタルム』の著者で、植物・動物分類学の基礎をなしたとされる博物学者ジョン・レイや、「ポイルの法則」で知られるロバート・ポイルと親しくなる。このとき既にスローンは、かなりの数の貴重な植物標本のコレクションをもっており、レイはその発見や観察についての本を出版するように熱心に勧めた。だが、スローンは、費用を考え、断念したという。後年、医師として名声を確立するスローンも、若き頃は、金銭の工面に苦

勞していたのである。フランスのオランジュ大学で医学の学位を得て、モンペリエ大学で植物学や解剖学を学んだスローンは、ロンドンに戻り、二十四歳で開業医となった。

カレッジ・オブ・フィジシャンズ(医学校)の特別研究員、王立学士院のメンバーとしても認められ、そのまま名声と富の階段を一気に駆け上がるかと思われたスローン。しかし、そうはしないのは、非凡なる好奇心の持ち主所以である。

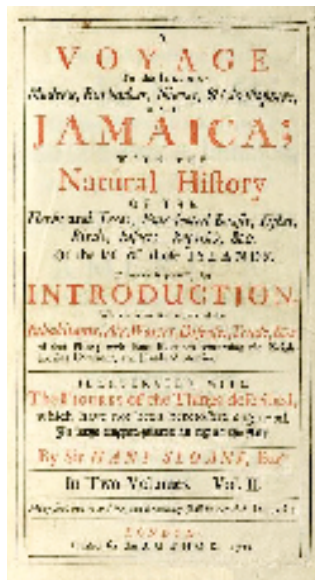
当時ジャマイカを統治していたアルバマール公が侍医を探していること聞きつけ、収入の大幅減を顧みることなく、喜び勇んで随行することにしたのだ。後に、スローンは、こう書いている。「当時、私は若く、耳に

したことを実際に自分の目で見ないと、気がすまなかった」。

しかし、不運にも赴任から数カ月後、アルバマール公が急逝。予定より短い約二十カ月の滞在を経て、スローンはロンドンに戻る。その手に、西インド諸島のさまざまな植物標本を携えて。

持ち帰った植物は、ロンドンの人々の想像力を掻き立てた。自分の家にもスローン邸のような植物園をつくる

西インド諸島での見聞をもとに、スローン卿が一七二五年に発表した著作。



ろうと、庭師を西インド諸島に行かせた貴族もいたほどだという。



### 運命を決めた皇太子のつづき

その頃、スローンが居を構えているのは、ブルームズベリー・スクエア

近くのグレート・ラッセル・ストリート。現在、大英博物館が建つ界隈だ。このスローン邸で、開かれていた夕食会はある種、名物とでもいうべきものだった。概ね、午後五時に始まり、参加者は男性ばかり。というのも、スローンの妻は夫をおいて他界、娘たちもそれぞれ嫁ぎ、スローン邸には女性がいなかったからだ。

スローンは、英国流の乾いたユーモアを交えながら、闊達に喋った。

一方で、決して食べ過ぎることはなく、酒はワイングラス一杯だけ。食事が終わると、参加者一同は決まって、彼の膨大なコレクションを鑑賞し、話に花を咲かせた。

スローンの交際範囲は広く、ヴォルテール、ヘンデル、アン王女とも親交があった。ヘンデルが、うかつにも、熱いバターつきマフィンのある貴重な写本の上に置いてしまい、スローンを怒らせたという逸話も残る。

王室の侍医にも就任し、五十六歳のときに准男爵位の称号を得る。六十七歳で、ニュートンの死去を受けて、王立学士院の院長職に就いた。多忙

## 大英博物館をめぐる主要な出来事

1753	ハンス・スローン卿死去 大英博物館法成立
1754	モンタギュー・ハウス買収
1759	大英博物館オープン
1775	クック船長、太平洋地域の民族資料を寄贈
1802	ロゼッタ・ストーンを収蔵
1816	パルテノン神殿彫刻群を収蔵
1826	新館の着工
1842	モンタギュー・ハウスの取り壊し始まる
1848	現博物館のほぼ全容が完成
1883	自然史部門の資料をサウス・ケンジントンに 新設した大英博物館自然史部門分館に移動
1963	サウス・ケンジントン分館が、自然史博物館 として分離独立
1998	大英図書館がセント・パンクラスに移転



かつての大英図書館のぼう大な蔵書を閲覧する場所として設けられたリーディング・ルーム。現在はグレート・コートの中心にすえられている。数々の著名人、知識人がここを利用したが、中でも有名なのはカール・マルクス。『資本論』で知られるこの共産主義思想家は、1850年から約30年間、ほぼ毎日通いつめたという。



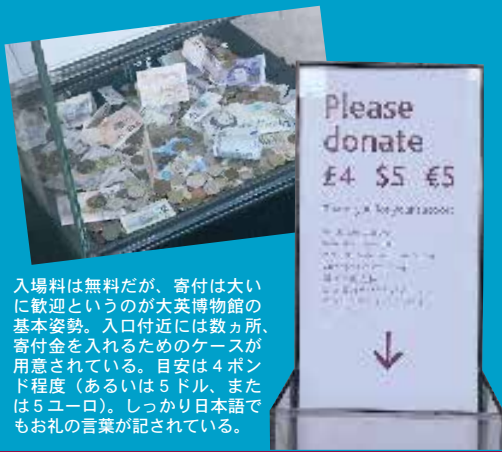
# オープン当初は、 入場まで4ヵ月待ち 「子供はお断り」だった!

「好奇心旺盛な人々の知的欲求、すべての人々の学習、研究、情報収集に役立てたい」というスローン卿の意に沿って、「一般無料公開」を大原則として掲げる大英博物館。しかし、開館当初は、入場するのに煩雑な手続きが必要で、子どもの入場も認められていなかった。さらに、実は一時期、入館料をとった時期もあるのだ。

開館当初の手続きとは、こんな具合だ。正面玄関の脇に、ロッジがあり、そこでポーターに氏名、入館を希望する理由、住所を伝える。それをもとに、司書が、この入場申請者が、「大英博物館を利用するのに適切な人物かどうか」を判断する。10歳以下の子ども入場は不可。規則で、ごさっぱりした服装をすることが求められていたというのだから、なんとも堅苦しい。司書に認められれば、入場券が発行される。入場券を手に入れるために、2度、3度、足を運ばねばならないこともざら。3度目に、「やつと中に入れる」と思ってやってきても、数時間、待たされる場合もある。というのも、入場券は、開館中毎時間10枚しか発行できないと決められていたから。1776年当時には、4月に申請をした人たちが、8月になってもまだ待たされているという混雑ぶりだったという。一旦、入館が許されても、自由に歩き回るのは許されず、グループに分けられ、係員の案内に従わねばならなかった。

◆◆◆◆◆  
入館料を導入したのは、1974年。1972年に、政府が法改正をして、公的博物館やギャラリーが入館料を徴収することを許可。「入館料を徴収すべき」というのが国の意向だと解釈した大英博物館の理事たちは、1974年1月2日から、一般10ペンス、高齢者、子ども、障害者5ペンスの入館料を徴収し始めた。しかし、その後、3月に政権が交代。新政権が最初に行った政策のひとつは、入館料徴収を許可する法案の廃止であり、それに伴い大英博物館の入館料もまた無料に戻った。

その後、数々の改革を経て、今では開館時間中ならば、誰でも出入り自由。入館料の導入も議論はされるが、以降、導入には至っていない。スローンの遺志は、いまもしっかりと受け継がれているのだ。



入場料は無料だが、寄付は大いに歓迎というのが大英博物館の基本姿勢。入口付近には数ヵ所、寄付金を入れるためのケースが用意されている。目安は4ポンド程度(あるいは5ドル、または5ユーロ)。しっかり日本語でもお礼の言葉が記されている。

な日々を送っていたが、暇を見つけては自分のコレクションの手入れをし、新たに買い足すものがないかと情報収集にも余念がなかった。

八十一歳で医師を引退したスローンは、チェルシーに購入した邸宅で晩年を過ごす。自慢のコレクションももちろん、一緒にチェルシーに移し、自分のコレクションを眺め、庭園を散歩する静かな日々を送っていた。しかし、そんな毎日を送るうちに、ある不安が頭をもたげてきた。「自分の死後、このコレクションはどうなってしまうのか。分割され、散り散りになってしまうのだろうか」。そう考えると、耐えられない思いがした。

スローンが八十八歳のとき、チェルシーのスローン邸をフレデリック皇太子夫妻が訪れた。

緑色に光るエメラルド、パープルのアメジスト、黄金のトパーズ……。部屋の中に据えられたテーブルの上で、まるで



チェルシーのフィジック・ガーデン Physic Garden内に建つハンス・スローン卿の像

「スローンの遺産は単なるガラクタではない」と議事を説得するため、様々な人物が手を変え品を変え、働きかけた。スローンのコレクションを管理していたジェームズ・エンプソンは、「コレクションの価値は八万ポンド。二万ポンドというの、破格のバーゲン」と主張。加えて、「年間の維持費はたった五百ポンドしかか



## 宝くじ頼みの 資金集め

ゆつくりと眺めたのち、皇太子は、これらのコレクションは大変貴重だと評し、「一般公開されると、どんなに役立つだろうか」と感想をもらした。この皇太子の発言に、スローンはピンとくるものを感じた。そして、訪問から一年後、スローンは遺書をしたためたのだった。

自然界に存在するかのよう、輝く色とりどりの自然石。別のガラスケースに飾られた翡翠や瑪瑙でつくられた器。本や植物の標本、いくつもの写本で埋め尽くされた部屋。エジプト、ギリシャ、ローマ、英国、インドの様々な古美術品や動物の剥製。



資料の収集家だったホルス・ウォルポールも、議会宛に手紙を書いた。「スローン卿は、コレクションを八万ポンドと見積もっています。カバやひとつ耳のサメ、ガチョウほどの大きさもある蜘蛛などに興味を覚える人なら誰でも、それくらいの価値を認めるでしょう」。この手紙が、どれほど効果があったのかは、分かっていない。ちなみにコレクションの価値には諸説ある。スローン自身は五万ポンドと見積もったこともあるようだ。

管財人たちの懸命の働きかけにも関わらず、状況は好転しそうにない。そこへ、救世主が現れる。下院議長のアーサー・オンズロウ (Arthur Onslow) Ⅱ 右の肖像画Ⅱである。知識人として知られたオンズロウは、国家によるコレクションの買い上げ案を再び議題として取り上げるために尽力。結果、特別委員会で議論されることとなったのだ。

「知らない」とさらにブツブツいわゆるセールストークで、実際の維持費はもつとかかったようである。管財人の一人

なぜ、オンズロウは、この計画に興味を寄せたのか。背景にあるのは、彼の「知」に対する愛である。こんな逸話がある。一七三二年十月二十三日の午前二時頃、ウエストミンスター・パレスの西側にあるアシュバーナム・ハウスに収蔵されていたコットン家の蔵書が、火事に見舞われた。この蔵書とは、コットン家が三代にわたって集めた書籍や写本のコレクションで、中には『大憲章(マグナ・カルタ)』の原典や古詩『ベオウルフ』の写本など、貴重なものが含まれており、国の管理下にあった。火事の現場に到着した消防士たちは最初、灰になっていく貴重な写本には注意を払わず、とにかく火を消そうと、水を放つことに懸命だった。しかし、その努力もむなしとわかり、やっとな管理人の「写本を一冊でも多く救うべきだ」という言葉に従う。ただ、写本の詳しい知識をもつものは少なく、次から次へとやみくもに、写本を窓から放り出した。そこに到着したのが、オンズロウ。火事の知らせを受けるなり現場へ駆けつけ、火の粉が舞う中、貴重な本を選び分け、自ら写本を安全な場所へと避難させたのだ。スローンの遺志を実現するに当たり、一番大きな問題は国の財政難。「何か方法は無いだろうか」。オンズロウは、知恵を絞った。そして、宝くじで財源を確保する、という妙案を思いついたのだ。

競馬、闘鶏、サッカーくじなど、賭け事の多くは英国で発展したといわれるが、当時の英国は空前の宝くじブーム。国民がこぞって、宝くじを買っていたという。オンズロウは「国庫からは一ポンドとして支払う必要はない」といつて議事を説得することに成功。賭け事好きな英国国民の国民性のおかげでというべきか、とにかく財源問題は無事、解決し、管財人たちは胸をなで下ろしたのだ。

スローンのコレクションを収蔵する博物館が設置されることになり、ここにはオンズロウが火事から救い出したコットン家の蔵書のほか、散逸を防ぐための手だてが必要だったハリー家蔵書も併せて収蔵されることになった。ハリー家の蔵書とは、オクスフォード伯ロバート(一六六一―一七二四)とその息子エドワード(一六八九―一七四一)によるコレクションで、約六千冊の書籍・写本類一万四千五百冊の公文書類、四万点の政治パンフレット類が含まれていた。最初の本格的な『英語辞典』を一人で編纂した文学者サミュエル・ジョンソン博士(一七〇九―一七八四)は毒舌家として知られるが、彼も「いかなる図書館にも勝ると絶賛したほどの内容だった」。



2000年にオープンしたグレート・コートの中心に座する、リーディング・ルーム

一七五三年六月七日、「ハンス・スローン卿、ハリー家蔵書の購買およびコットン家蔵書の所蔵改善に関わる法」いわゆる「大英博物館法」が成立。スローンの死から五ヵ月余りが経っていた。

スローンの遺志を実現するに当たり、一番大きな問題は国の財政難。「何か方法は無いだろうか」。オンズロウは、知恵を絞った。そして、宝くじで財源を確保する、という妙案を思いついたのだ。



# パルテノン神殿の彫刻群は誰のもの？

正面玄関から大英博物館に入り、ロゼッタ・ストーンの周りにできた人ごみをかかわして、奥へと進む。ガラス扉を開く。真っ白い大理石の壁に囲まれたまるでコンサート会場のように大きな部屋。天窓からは、柔らかな自然光が差し込んでくる。四方の壁に沿って、展示されているのは、ギリシャの首都アテネにあるパルテノン神殿を飾っていた大理石の彫刻群だ＝右下写真はその一部。「パルテノン・ギャラリー」。大英博物館の数あるギャラリーの中でも、最多の閲覧者数を誇るといわれる。



これらの彫刻群、かつては「エルギン・マーブル」と呼ばれていた。19世紀初頭、オスマン・トルコ帝国に英国特命全権大使として派遣されたエルギン卿 (Thomas Bruce, 7th Earl of Elgin and 11th Earl of Kincardine 1766-1841) = 肖像画＝が、当時オスマン・トルコ帝国支配下にあったアテネから英国に持ち帰ったことによる。正確に言えば、「持ち帰った」とするのは英国側の弁。ギリシャ側は、彫刻群は「略奪された」と主張、返還を迫っているのだ。



そもそもは、大英博物館の理事を勤めたウィリアム・ハミルトンなる人物が、英国の芸術向上のため、古代ギリシャの彫刻群の調査をするようエルギン卿に勧めたことに端を発する。ハ



©Tilemahos Efthimiadis

ミルトンの勧めを受け、乗り気になったエルギン卿だが、当初は彫刻そのものを英国に送る予定はなかった。美術家や画家からなる調査団が現地へ赴き、彫刻を写生したり、石膏の型をとったりと、「調査」するだけのはずだったが、現地の役人の妨害が激しく、作業は遅々として進まない。業を煮やしたエルギン卿が、トルコ政府にかけたところ、皇帝から調査を許可する勅令が発行された。しかも、驚くことにその勅令は、彫刻や碑文を持ち去ることを認めていたのだという。

この勅令を受け、エルギン卿はパルテノン神殿から彫刻を剥がした。彫刻群は約10年にわたって、船でアテネから英国に送られ、大英博物館に収められたのだ。

ギリシアは1892年にトルコから独立して以降、英国側に彫刻群の返還を要請し続けている。1981年に、映画「日曜はダメよ」の主演女優として知られるメリナ・メルクーリが文化・科学大臣に就任してからは、ユネスコなどを巻き込んで、大々的なキャンペーンを展開したが、返還には至っていない。英国側は、「彫刻は、当時の政権の許可を得て、持ち出された」「当時、荒れるがままだったパルテノン神殿に彫刻が置かれていたなら、崩壊はさらに進んでいたはず」などと持ち出しを正当化しているほか、「世界各国の人々に、エジプトやアッシリア、ペルシャなど他の文明との関係の中で彫刻群

2009年6月にアテネにオープンした、「新アクロポリス博物館 (New Acropolis Museum)」。ギリシャ政府はこの館内に、パルテノン神殿彫刻群を収めるべく、返還要請運動を続けている。



©Tilemahos Efthimiadis

を見せられる大英博物館がもっとも適した展示場所である」などと主張、返還の拒否を続ける。

近年では、エルギン卿がトルコ政府から受け取ったのは正式な皇帝の勅令ではなかったという学説が発表されるなどし、まだまだ議論は混迷を深める気配だ。



松宮秀治・元立命館大文学部教授の著書『ミュージアムの思想』によると、かつて、非西欧圏から多くの美術品、考古学資料が、西欧に持ち込まれたが、大半は合意の上であったという。当時、

「美術」「文化」といった西欧的価値観が、そこでは共有されていなかったことによる。日本の浮世絵が、陶磁器の梱包紙として大量に海外へ流出した例を見てもしかり。非西欧圏が近代化され、西欧的な価値観をもつようになると、過去の取引を「不当」だと感じ、返還要求をするようになるという。

近年ではエジプトも、大英博物館にロゼッタ・ストーンを返還を強く求めている。ルーブルなど他の美術館、博物館にも同様の要求が寄せられている。博物館側が、いかに対応すべきかについては、意見が分かれるところだろう。しかし、これら一連の返還要求は、世界のあちこちに、西欧的価値観が浸透しつつあることの表れだと言えるのではないだろうか。



1799年、ナポレオン軍がエジプト遠征を行った際に発見されたロゼッタ・ストーン the Rosetta Stone。古代エジプトのヒエログリフ(神聖文字)、古代エジプトのデモティック(草書体)、ギリシャ語により同じ内容が記されており、この読解により、古代エジプト語の解明が大きく進んだ。  
© the Trustees of the British Museum

©Andrew Dunn





# 市民の遺産 大英博物館 VS 特権階級の遺産 仏ルーブル美術館



©Debianux

英仏を代表するミュージアムとして、よく並び称される大英博物館とルーブル＝写真。しかし、その成り立ちは、まったく異なる。この特集を読んでもらうだけでもお分かりのように、大英博物館は、スローンという一人の民間人が生涯かけてコツコツと集めた自分のコレクションを国に「押し売り」した。世話人たちが走り回り、なんとかオープンにこぎ着けた。いわば、市民による、市民のための博物館。

一方、ルーブル美術館の展示品は、元々、王家や貴族、教会など特権階級がもっていた財宝が、フランス革命を経て国有化され、一般市民に公開されたもの。よって、建物も、大英博物館のようなシンプルなデザインでなく、きらびやかな宮殿だ。

現在、ルーブル美術館として利用されているルーブル宮殿は、もともと、12世紀に要塞として建設された。その後、フィリップ4世が財宝をルーブルに収蔵し始める。続いて、イタリアのルネサンス運動に影響を受け、「パリを芸術の都にしよう」と思い立ったフランソワ1世が城

を王宮へと改築。17世紀になるとアンリ4世が多くの芸術家を住ませ創作活動を後押しし、ルイ14世やルイ13世の枢機卿であるリシュリューは芸術品を積極的に収集。こうして、時代とともに、宮殿には歴代王らによるコレクションが着実に増えていき、それがそのまま建物ごと一般公開されたのが、ルーブル美術館なのである。

サンクトペテルブルグのエルミタージュ美術館やフィレンツェのウフィツィ美術館、ローマのヴァチカン美術館なども、同じように特権階級が宮殿や庁舎などに集めた財宝が、そのまま公開されるかたちで生まれている。ルーブル美術館やエルミタージュ美術館がオープンする際には、世話人たちが、建物探しに奔走する必要なんて、まったくなかったわけである。

一七五九年一月十五日、大英博物館がその扉を開いた。事前に予約登録をしていた人々が、次々と中へ吸い込まれていく。英国から遠く離れた西インド諸島で根を下ろしていた色彩あふれる植物の標本、三十五万年前につくられた旧石器器、精巧な犬の彫刻が入ったアッシリアの石板、挿絵や装飾がふんだんに施されたリンドイスファーンの福音書の写本、マホガニーの展示ケースの中に、ところ狭しと並べられた物を眺め、見学者たちは、英国のはるか彼方に広がる世界、太古の昔に生きた人間の暮らしに思いを馳せた。

その後、ジェイムス・クック船長が太平洋探査から持ち帰った民族資料のほか、十九世紀に入るとパルテノン神殿を飾っていた大理石の彫刻群や古代エジプト文字、エジプト民衆文字、ギリシャ文字が刻まれた口ゼツタ・ストーンなど貴重な資料が続々と大英博物館に収蔵され、今も

一七五九年一月十五日、大英博物館がその扉を開いた。事前に予約登録していた人々が、次々と中へ吸い込まれていく。英国から遠く離れた西インド諸島で根を下ろしていた色彩あふれる植物の標本、三十五万年前につくられた旧石器器、精巧な犬の彫刻が入ったアッシリアの石板、挿絵や装飾がふんだんに施されたリンドイスファーンの福音書の写本、マホガニーの展示ケースの中に、ところ狭しと並べられた物を眺め、見学者たちは、英国のはるか彼方に広がる世界、太古の昔に生きた人間の暮らしに思いを馳せた。



一時帰国の際のお土産にも喜ばれそうなグッズが並ぶ、ミュージアム・ショップ。博物館の入口近くにあるショップより、グレート・コートにあるショップのほうが売り場面積も広い。

コレクションは増え続けている。手狭になったモンタギュー邸は一八四二年から取り壊しが始まり、その六年後には現在の博物館が完成。しかし、その後もスペース不足は続き、自然史部門はサウス・ケンジントン地区にある現・自然史博物館に、図書はセント・パンクラススの現・大英図書館に移された。



## 実を結んだスローインの情熱

スローインが晩年を過ごしたころには豊かな自然が広がっていたチエルシー地区。彼の世界後、界限には新しい通りやスクエアが次々とでき、そのうちのいくつかにスローインにちなんだ名前がついた。スローインと同様に、医師でありながら鳥類や植物類に興味をもち、熱心に研究したドートリー・ドウルイット博士(Dr. Dorothy Drouitt) (一八四八―一九四二)は、著書にこう記している。「スローイン通りは、実によくハンス・スローインの人生を表現している。それはとても長く、豊かで、まっすぐだ」。



サウス・ケンジントンにある自然史博物館。写真上はセント・パンクラス駅近くの広大なスペースへの移転を果たした大英図書館(同左)@Mike Peel

今や、大英博物館を訪れる人の中で、創始者ともいえるスローインに思いを馳せる人は限られるだろう。しかし、この人物がその長い生涯かけて集めたコレクション、そして博物館を開館したいという率直な願いがなければ、大英博物館は、この世に生まれなかったのである。

## 大英博物館断面図

■向かって左が、グレート・ラッセル・ストリート Great Russell Street沿いの正面側。右側は、いわば裏口にあたり、モンタギュー・プレース Montague Place に面している。

■図内の番号は展示ルームの番号。

■リーディング・ルーム Reading Room を中央に配したグレート・コート Great Court の屋根は総ガラス張り。自然光のあふれるげいたく空間だ。ここにあるカフェでひと休みするのもよし、ひとつ上のレベルにある「コート・レストラン Court Restaurant」(料理はモダン・ヨーロピアン。しゃれた雰囲気)で、ゆったりと食事をするのもいだろう。このほか、博物館内の南西の角にギャラリー・カフェもある。

## トラベル・インフォメーション ※2010年3月24日現在

**British Museum**  
Great Russell Street, London WC1B 3DG  
www.britishmuseum.org  
Tel: 020 7323 8000

【オープン時間】 毎日: 10:00 - 17:30

※木・金曜日は20:30まで  
※1月1日、グッド・フライデー、12月24～26日は休館

【レストラン/カフェ営業時間】

**Court Restaurant**  
毎日: 10:00 - 17:30 / 木・金曜日: 22:00まで

**Court Cafes**  
毎日: 9:00 - 17:30 / 木・金曜日: 21:00まで

**Gallery Cafe**  
毎日: 10:00 - 17:00



上空から見た大英博物館。夕闇の中にかがぶグレート・コートとリーディング・ルームのシルエットが美しい。©the Trustees of the British Museum

